

## 庄野潤三の家族小説

——一九六〇年代を中心に——

### 綾 目 広 治

—

かつて江藤淳は、『成熟と喪失』の中で『夕べの雲』(一九六四・九―一九六五・一)は「治者の文学」である、と述べた。<sup>1)</sup>主人公の大浦は、風よけのない丘の上にぼつんと建てられた家に象徴されるような、「孤立し露出させられた」家族を、いわば「不審番」の役目を自覚しつつ守っている「治者」である、と。周囲の大風にさらされていく大浦の家が、寄る辺のない「恐れと怯え」をあらわしていることは確かである。だが、その不安と恐怖に耐えて家族を守ろうとする大浦のような存在を、「治者」と呼べるだろうか。大浦が「父」の役目を果たそうとしていることは間違いないだろうが、しかし、「父性」を持つ者が即ち「治者」である、というわけではない。また、外部に抗して立っている者も、必ずしも「治者」とは限らないのである。「治者」とは、内部を「治める」者のことである。

大浦は、家族をけっして「治め」てはいない。むしろ、その逆に大浦は家族によって支えられ、家族によって安定を得ているともいえる。

また『夕べの雲』では子供の存在が大きな比重を持って描かれているが、江藤淳はそのことについてほとんど触れていない。崩壊した「母」なるものを担っている存在としての長女の晴子についての言及はあるものの、他の子供達についてや、さらには父と子供達との関係についても、江藤淳は論じることをしていない。もし、「治者」ということをいうのならば、「治める者」としての父と「治められる者」としての子供達との関係についての論及があつて当然と思われるのだが。ともかくも、『夕べの雲』を「治者の文学」として読もうとする江藤淳の読みは、「治者」なる者の存在を正当化しようとする、言葉の本来の意味でのイデオロギッシュな読みといえよう。そのような読みとは異なつて、大浦を「常民」として捉えた亀井秀雄の読み<sup>2)</sup>のほうが、むしろ作品の内実<sup>3)</sup>に即していると思われる。

しかし、「常民」の概念は共同体の存立と相即であるはずで、『夕べの雲』は、その共同体がほぼ完全に崩壊してしまつた時代の一家族を描いた小説であることを考えると、「常民」という捉え方にも留保をつけなければならぬだろう。もっとも、亀井秀雄は、「この欲望アナーキーの時代にあつて、『足る』ことを知つた稀有な「常民」の姿を描いた作品」と述べていて、大浦が「常民」であるとしても、それはあくまで例外的な存在としてである、ということを描きしている。

だが、それにしても、大浦は「常民」だろうか。彼は、共同体が崩壊してしまつた時代に寄る辺のなさを感じている、孤立した都市移住者ではないだろうか。そのことに目を向けると、「治者」云々はともかくとしても、大浦の中にある「怯えの感覚」を指摘した江藤淳の論に、あくまでその指摘に関してのみ同意したい。要するに、大浦とは、「治者」的な存在ではなく、いうとすれば「常民」的存在だが、しかし、もはや「常民」概念が実体を指すものとしては成り立たなくなつた時代の「庶民」ではないだろうか。

このように考えてみると、『夕べの雲』を代表とする一九六〇年代の庄野潤三の小説は、当時の時代相おもに家族、家庭の場を通してよく写し取つているように思われる。本稿では、そこで提出されているいくつかの問題について考察してみたいが、さらに今日の観点からはそれらの問題はどのように考えられるかということについて、最後に言及してみたい。まずは庄野文学の特質について見

ておくことからはじめたい。

## 二

庄野潤三は、若い頃からすでに自分の文学の方向を掴んでいたと思われる。人との交わりが日常生活の中でつなぎ合わされたもの、それが人生であり、その記録が文学である、という考えである。九州大学時代の日記をもとにした小説『前途』（一九六八・八）の中で、主人公の述懐として次のような言葉がある。

僕は、こういうことを云つた。結局、青春というのは、遠いところにあるものではなくて、こうした地味な、ひとつひとつは小さな、取り立てていうこともないような友人との交わりの日々のことだと思ふ。女のひととの恋愛がないから、自分の青春は空しいとする者は、たとえ意中のひとを得たとしても、その青春はやはり空しいものだろうと。<sup>3)</sup>

この中の「青春」という言葉を「人生」という言葉に置き換えれば、この述懐は、庄野潤三のその後の文学を先取的に暗示しているといえる。もちろん、『前途』が当時の日記をもとにしていても、『静物』（一九六〇・六）や『夕べの雲』などを経てきた庄野潤三の考えが投影しているだろうことも考慮しなければならぬが、多分、庄野潤三は若い時からそのように人生を捉えていたと察せられる。そして、このような捉え方は、彼のいわば生得的な資

質にもつづいていられると思われ。日々の、瑣末といえは瑣末な生活の一齣一齣、その中での人との交わり、そこにこそ人生の意味があるという考え方は、いわば大きな観念（あるいは、リオタル風にいえば大きな物語）に憑かれぬあり方ともいえる。「遠いところ」ではなく、日々の身近な営みに目を向けようとするのである。

こういうあり方を、かつての吉本隆明ならば「大衆の原像」と呼ぶところであろうが、このような大衆的、あるいは庶民的なあり方には正負の両面があると思われる。正の面は、いうまでもなく、大きな観念に憑かれた浮ついた知識人に対して批評的な存在でありえるということだが、負の面は、たとえば『前途』でいえば、主人公は一二月八日に久住山の雪をけて下山し、途中で宮城を掃拝するが、その一方で、ドイツ語の授業のたびに教師によって宮城掃拝させられるのを苦痛に感じたりするところにあらわれている。

もっとも、庄野潤三の世代に、戦時下において軍国主義に対して批判的であることを求めるのは無理であるが、それにしても、いったい主人公は軍国的なのか反軍国的なのか、少々理解に苦しむところである。この少しばかり不可解なエピソードについては、坂田寛夫も触れているが、しかし、このようなあり方こそ大衆的、庶民的なあり方といえるのではなからうか。それは、大きな観念やイデオロギーに陶醉したり熱狂したりすることはあまりないが、だからといって別段それに批判的であるのでもない。むしろ、それに対して

従順であるともいえる。つまり、日常の生活感覚に違和を感じさせたり抵抗感を持たせたりしない限り、大きな観念に対しても、真に熱狂しないが従順なわけである。庄野潤三の生得的と思われる資質は、このような大衆的なあり方に通じていると考えられる。

もし、このようなあり方で人生を生きていくとするならば、その人生は、一つの観念やその観念にまつわる感情なりがいわばモチーフとなって、その人の人生をひっぱっていくというふうなことは、あまりないだろう。このことを小説の問題に置き換えて考えてみると、こういう人生のあり方を小説化した場合、大きな観念（あるいはそれにまつわる感情）とその人の人生上の具体的な出来事との葛藤、調和などをめぐる関係といったようなことは、主題にはならないであろう。実際、庄野潤三の小説には、そのような主題はない。もちろん、『流れ藻』（一九六六・一〇）の主人公のように、商売を成功させたいという思いがあり、それが彼の人生を導いていくのだが、しかし、その思いはここで述べているような観念ではないのである。

さらにいえば、大きな観念に領導されない人生は、（偶然）性によって大きく左右される人生でもあるといえる。というよりも、当人には人生がそのように感じられるだろうということである。むしろ、自ら抱懐する観念に従って生きていくような人間でも、その人生が（偶然）性によって左右されることには変わりはない。ただ、その場合、たとえ左右されたとしても、あるいは人生の軌道修正を

迫るような〈偶然〉的な出来事にぶつかったとしても、当人はそれらの出来事や体験を觀念のなかに回収してしまうのである。それによって意味付け、その中に位置付けてしまうのである。

それとは逆に、そういう大きな觀念がないならば、その人生には〈偶然〉性というものがどうしても前景化してくるであろう。少なくとも当人にはそのように感じられるはずである。『流れ藻』の主人公夫婦は、次のような感慨をもらしている。

「全くうなぎ屋をやるとは思わなかったな」

近雄は四ヵ月前にこの店を始めた時にいったのと同じことをいっている。

二人が一緒に暮らすようになってから、たまにこの日のことが話になると、照代は「あの時、私たちが本八幡の駅の前で会わなかったら、結婚していなかったわね。」という。感慨深げにそういう。

また、〈偶然〉性というものは、それが強烈に感じられる場合、逆に〈必然〉性のように思われてくるといふことがある。庶民の感覺でいえば、それが〈縁〉である。やはり『流れ藻』の主人公の述懐部分であるが、語り手の言葉によって次のように述べられている。

夫婦になるには、何かきっかけが要る。お袋が死んだがために、近雄は感じるところがあった。これまでかりそめに一緒に暮ら

しているような気持ちでいたこの女であるが、やっぱり夫婦になるように定められていた女かも知れないと。

これらの言葉は対人関係に関わったものであるが、このように人生を〈偶然〉や〈縁〉によって納得しようとする主人公達にとつては、社会や時代の動きというものは、あたかも自然条件のような、いわば〈与件〉として感じられているのではないかと思われる。『紺野機業場』（一九六九・九）の主人公は、満州製糖や日満鋼管などの満州株が敗戦でみな駄目になったとき、「爆撃されたと思うて、諦めようまいかいや」と自分を納得させる。また、物を買って損をしたりするようなときにも、「まあ、爆撃に会うてなくなつたと思うて、諦めようまいかいや」というふうに思う。戦争による爆撃は、あたかも自然災害のように感じられているのである。

〈与件〉としての社会や時代の動きの中で、大小の〈偶然〉に翻弄されながら生きていくのが人生であり、そこに喜びも悲しみもある。したがって、その人生を描く小説の方法として、登場人物達には前述したように大きな觀念がないわけだから、〈偶然〉的な出来事はそれによって意味づけられたり回収されたりすることなく、日々の出来事は断片のまま提示され、それらの断片の集積が彼らの生活であり人生である、というような小説の作られ方になってくる。庄野潤三の小説が断片の集積体のようになっているのは、そのためである。

ところで、〈偶然〉性が前景化されて意識されるということは、別の観点からいえば、仏や神の摂理というような超越的なものに対する感覚が希薄になっているということでもある。人生を領導し、意味付け統括するような超越的な原理がなくなっているわけである。もっとも、『夕べの雲』の中で、大浦家では賈い物などをしたときには一旦ピアノの上に置く習慣があり、それは仏壇に供え物をするような感覚であることが語られていて、宗教に対する感覚がまだ残滓として存続していることを示しているが、しかし、それは生活や人生を律する原理のようなものでははやくなっていく。希薄になっていくのは、それだけではなく、先にも触れたように共同体も形骸化しているか、もしくははなくなっている。『流れ藻』の主人公は村落出身者だが、彼の内面には彼の行動を規制する共同体規範のようなものはないのである。

大きな観念や超越的なものとは無縁で、また共同体規範もなくなった時代に、ひとはどのような思いを抱いて生きていくのだろうか。おそらく、その中で人生に対する思いを突き詰めていけば、人生は無常であるという思いに行き着くかもしれない。無常観というようにはつきりしたものに引き着かなくても、過ぎ去っていく時の流れに対しての思いを敏感にするだろう。それは、〈今〉の時間や〈今〉の幸せ、そして〈今〉の人生は、やがて消えていく、ただ単に消えていくという思いでもある。『夕べの雲』の大浦は、次のような思いを抱く。

このようにして彼等はムカデ馴れのした夫婦になり、次第に年を取って行く。子供はみんな大人になって、家にいなくなり、昔、テレビの西部劇をみていた時、知らぬ間に壁の真中あたりでツイストのような身振りをしていた大ムカデがいて、びっくり仰天したことも、とっくに記憶の彼方に沈んでしまっていることだろう。

「ここにこんな谷があって、日の暮れかかる頃にいつまでも子供たちが帰らないで、声ばかり聞こえて来たことを、先でどんな風に思い出すだろうか」

すると、彼の眼の前で暗くなりかけてゆく谷間がいったい現実のものなのか、もうこの世には無いものを思い出そうとした時に彼の心に浮ぶ幻の景色なのか、分からなくなるのであった。

『夕べの雲』の基調をなしているのは、このような思いである。先に私は、庄野潤三の小説の方法として断片の集積化ということ指摘したが、それらの断片は何でもない日常の一齣一齣であることが多い。なぜそうなのかといえば、それは、生活や人生が結局は時とともに流れ消えていくことに敏感であるからこそ、それらの断片の一つ一つが大切なもの、いとおいしいものとして痛切に感じられるからだ。

さらに付け加えると、それらの断片を記録し書く時の庄野潤三の

目の位置についていえば、〈今〉の出来事も、常に〈先〉の視点から書かれていることである。〈今〉のことだけれども、それらがすでに消えてしまった時点から、あるいは消えてなくなる予感とともに書かれているのである。引用した、ムカデの話や谷間の場面も、そうしたものとして読めるだろう。また、『夕べの雲』には、長女の晴子が修学旅行に出かけた時に、大浦が娘の部屋に入る場面があるが、そこでの大浦の感慨の持ち方にもそれが込められているように思われる。

(略) 不思議なもので晴子が旅行に出かけた後は、ふだんの部屋の空気と違っている。

部屋に入ると、すぐに分る。

ひと月も二月もないのではない。五日間の旅行であるのに、出かけた日からもういつもの部屋のようになくなる。

「おかしなものだな」

いつも晴子が学校へ行っている時も、部屋の中はこんな風で、少しも違っていない。(違うのは通学鞆が床の上に置いてあることだけだ。)それでいて、はっきり、いつもと空気が違うことが分る。

これは、たとえば嫁入りした後の娘の部屋に入った父親の感慨を、先取りに疑似体験しているような箇所にも読める。〈今〉の生活は

やがてなくなるもの、〈今〉の幸せもいつかは消えていくもの——  
そういう思いから〈今〉を見るから、このような感慨を持つのである。『ザボンの花』(一九五五・四〇八)には、その〈先〉の視点で自分の死後にまで及んでいる箇所がある。

(いずれば、おれもあの墓の下に入るんだな。(略) そうすると、誰かがやって来てやつぱりこんな夏の夕方、おれの墓石の上からバケツの水を注ぐんだな) (略) すると、何か愉快なような、笑い出したくなるような、しかしその底は変にさびしい、妙な気持ちになって来るのであった。

また、庄野潤三は『ガンビア滞在記』(一九五九・三)のあとがきで、この本に滞在記という名前を付けたが、自分達もこの世の中に滞在しているともいえるわけで、「自分の書くものも願わくはいつも滞在記のようなものでありたい。」と述べ、さらに別のところでは『ガンビア滞在記』に関連して、

『夏の夜の夢』のせりふではないが、舞台があり、生きている人があり、それがいなくなると舞台がからっぽになって、静かになる。どんなに楽しく過してもそれが一瞬のものという考えが、自分のfundamentalなthoughtになるのだろうか。<sup>5)</sup>

とも語っている。まさにその考えは、庄野潤三のfundamentalなthoughtであるが、それでは、そのようないわば無常の思いに行き着くようなthoughtを持っている人間やその人生を、ともかくも

支えてくれるものは、一体何なのだろうか。大きな観念や超越的なものにすることが出来ず、共同体も崩壊した後、人間が拠り所を見出すことのできるものがあるとすれば、それは何なのだろうか。庄野潤三の小説は、それは家族である、と語っているように思われる。

### 三

『夕べの雲』に描かれている家族は、いわゆる核家族であり、その意味で近代的な家族である。核家族を、生活形態の上で他の親族から切り離された、父母を中心とする少人家族と捉えると、このような形態面での核家族は、戦前においてもすでに全体の五割を超えていた。<sup>6)</sup>しかし、その場合でも、家族の日常生活のあらゆる分野に共同体は介入していたようで、実態面でも家族が自立（他面からいうと孤立でもあるが）するのは、共同体が崩壊し、その規制から家族が解放された後、すなわち完全には、共同体の残滓もなくなった戦後からといえる。もっとも、部分的には、産業化が進行し都市化が進む明治末年から大正期に、都市の新中産階級の中にすでに近代的な家族が誕生していた。ここでいう〈近代家族〉とは、落合恵美子の整理を借りると、「家内領域と公共領域の分離、家族成員相互の強い情緒的關係、子ども中心主義、核家族」などの特徴を持つ家族のことであるが、このような家族は、牟田和恵も述べているよう

に「一九六〇年代以降の高度経済成長によって大衆化する」<sup>8)</sup>のである。『夕べの雲』の家族は、まさにその一例である。

したがって、大浦家には、かつては封建遺制の象徴のようにいわれた家父長権——ただし、これは封建遺制というよりも、家族国家観にもとづく天皇制を支えるために明治国家が創出したものであることが近年の研究によってあきらかにされている——<sup>9)</sup>がないことはいうまでもない（最初に言及した江藤淳の論は、大浦を現代版の家父長と捉えている、あるいは捉えたがっている）。大浦家では、父ではなく子供が家族の中心なのである。『子供』の誕生の中でフィリップ・アリエスは、おもに一六、一七世紀のフランス社会を対象に近代家族の原型が生成していく過程も論じているが、その家族においては「家族が子供達を中心に凝縮する」、「この家族意識はまた、子供期の意識としっかり結びついている」<sup>10)</sup>と述べている。庄野潤三の家族小説も子供達を中心になっていて、近代的な核家族の典型が描かれているといってもいい。とはいえ、単に典型的なだけではなく、「子供期の意識」に関しては、庄野潤三特有の思い入れが込められているのである。

前述したように『夕べの雲』は、都市移住者の家族の物語（農村からではなく、関西の大都市から東京への移住である）であり、寄る辺のない都市移住者が拠り所とするのが家族であることを語って

いる小説であるが、主人公がその家族の中の何にとくに安らぎを見出しているのかといえ、それは子供の存在であると思われる。『夕べの雲』以外の他の家族小説においても、子供が本心に愛情を持って描かれている。もっというなら、庄野潤三は子供もむろんであるが、それよりもむしろ子供時代というものをいとおしんで描いているのである。都市化した近代社会の荒波の中で寄る辺を失った人間にとって、唯一安らぎの時間を与えてもらえるのは子供時代（とくに幼年時代）だけだ、というように。次に引くのは、幼いわが子を前にしての主人公達の気持ち語られているところである。

「四郎はいいなあ。学校へ行かなくてもいいし、会社へいかなくてもいいし、一日中遊んでいけばいいのだからなあ。遊ぶことが、仕事なんだからなあ。（略）まあ、それも今のうちだけだな。小学校へ行くようになれば、あとはもう人生の苦勞の連続だからなあ。考えてみれば、一生の間で、何の心配もなしにしたことをして遊んで毎日暮らせるのは、四郎の年頃のほんの三、四年間だけなものなあ」（『ザボンの花』）

人生はいつまでも幼児でいることを許してくれない。

幼稚園へはいったが最後、否応なしに小学校へ行かなければならない。そうして、どこへも行かずに家で遊んでいられた日のことをなつかしく思い出す時がきつと来る（『夕べの雲』）

たしかに、学校に行くようになれば幼年時代の安息の日々は失われるかも知れないが、しかし、少年時代でも大人の世界に比べれば、まだまだ輝いているのである。『ザボンの花』の中で主人公の矢牧は、期末試験が残り夏休みを直前に控えた中学時代の初夏の日々を回想して、「あんなに眼の前が宝石箱を引っくり返したように、眩しく胸のわくわくするような時は、それから後の人生にはちっとも無かった。矢牧はそんな気がする。」と思う。

子供時代をこのように思うのは、「年もだんだん大きくなって来ると、厄介なことがふえて来るものだ。」「この人生では、いいことはそんなに起るものではない。」（『夕べの雲』）というふうに、いわばベシミスティクな思いがあるためであるが、このベシミズムは、「この世でわれわれが知り合うもので、いなくなってしまうものはない」（同）というように、先に指摘した無常の思いにつながっている。むろん、大人である矢牧や大浦の眼（それは庄野潤三の眼でもある）から見れば、子供時代は、まだ無常を感じる年代ではない。子供時代とは何よりも家族、家庭という寄る辺、保護膜のなかで生きていける安らぎと幸福の日々なのである。子供達の日常の出来事——それは学校の話であったり、通学の途中での話であったりするが、庄野潤三がそれらの何でもないような出来事を掬いあげて小説中の挿話にするのは、いうならば、あたかも失われた楽園の日々を自分の子供達を通して再体験しているかのごとくである。



それはともかく、子供達に安息の日々を保障してくれるのは家庭であるが、それは大人にとつても個人を縛り付けるような桎梏の場なのではない。家庭は、安らぎの場であり、拠り所を失った現代人を支えてくれる、残された最後の砦なのである。庄野潤三の小説はそのように語っていると思われる。『夕べの雲』を代表とする、庄野潤三の家族小説が書かれた一九六〇年代は、テレビではホームドラマが茶の間の人気を集めた時代でもあるが、庄野潤三の小説は、家庭に安息の場を見出そうとした人々の気持ちを代弁した文学でもあったといえよう

ところで、もしもその家庭が崩壊したとしたらどうだろうか。初期の作品に属する『プールサイド小景』（一九五四・一二）は、その不安を描いた小説といえる。といつても、『プールサイド小景』は、その子感を孕んだ崩壊一歩手前までが描かれているのであつた崩壊の様子が描かれていたのではない。また、『静物』（一九六〇・六）は、崩壊の危機から立直つた後の時点から、その危機が暗示的に語られているだけである。

ただここで付け加えておくと、これらの小説では、家庭の崩壊が悲劇や愛憎劇につながるものとしてではなく、不気味さを露呈するものとして描かれていることである。もつともいうなら庄野潤三の小説においては、家庭の崩壊がいわば実存的不安を露呈させるのである。なぜそうかといえは、家庭が崩壊すれば、かつては生を意味

付け、人生の拠り所ともなった宗教や共同体などにもはや頼ることの出来ない現代人の、その最後の寄る辺も失うことになるからである。つまり、我々の生の、その孤独な有り様があからさまになるからである。だから、『プールサイド小景』は不気味な小説なのである。『静物』も人が拠つて立つ地盤の崩壊を暗示させ、その裂目を垣間見させる小説である。庄野潤三の小説が思想的な現代性を内在させているとすれば、その地盤喪失の感覚においてであるといえるかも知れない。

もうひとつ、現代性ということでは、とくに『プールサイド小景』に見られるように、現代人の疎外状況に通じる問題も語られている。『プールサイド小景』の夫の会社での話などがそれである。さらに、これまで言及してきた小説における、家庭こそ安らぎの場であるという内容も、裏返していえば、それだけ外の社会が辛いということも語っているといえる。子供時代だけが本当に無邪気な幸せでいられるというのも、そうである。また、『ザボンの花』の中で矢吹が「野蛮人の暮りに近いことをしたい」と思うところがあり、『夕べの雲』でも大浦に同様の思いを語らせるところがあるが、これらも、管理され競争を強いられる現代社会の疎外状況を、主人公達にかなわぬ夢を語らせることによって裏側からあらわしているといえよう。

#### 四

さて、おもに一九六〇年代の小説を中心に庄野潤三の文学について考察してきたが、そこで提出されている問題は、今日ではどのように考えられるであろうか。抛るべきものがなくなっていること、「この人生では、いいことはそんなに起るものではない。」(『夕べの雲』)と思わせるような苛酷な競争社会、管理社会になっていること、したがって疎外は厳然としてあること——これらは今日においても変わりはないかも知れない。しかし、庄野潤三が唯一の寄り辺と考えた家族や、さらにその家族の保護膜に守られて安息の日々を過ごすことのできた子供時代も、今日では必ずしもそういうものではなくなっている。

たとえば、家族のあり方をとってみても、上野千鶴子によれば、なにをもつて家族とするのかというファミリー・アイデンティティ自体がゆらいできているのである。一親等の血縁関係が家族のアイデンティティを保証するものとはいえなくなっている事例も増えてきている。たとえば吉本ばななのいくつかの小説に見られるような家族、すなわち従来の概念では捉えきれないような家族も出現している。さらに家庭内暴力や家庭内離婚にあらわれているように、家庭は必ずしも安らぎの場とはいえなくなっている。また、そのような家庭で育てられた子供には、幸福な子供時代というのはありえない

だらう。そうでなくても、幼い時から受験競争に巻き込まれている現代の子供達にとっては、子供時代は安息の日々ではないのである。

このような状況の中で、庄野潤三は家族の問題をどのように考えているのか、その問題をどのように文学の場で扱うのか。庄野文学を読んできた者は、そう問いかけたくなるであらう。しかし、残念ながら近年の庄野文学は、それらの問題とは無縁である。『インド綿の服』(一九八八・二刊)や『鉛筆印のトレーナー』(一九九一・五)、『一九九二・四』、『さくらんぼジャム』(一九九二・一)、『一九九三・一〇』などには、結婚して独立した子供達の家との、羨ましくなるような思いやりにあふれた交際や、眼の中に入れても痛くないような可愛い孫の話が語られるばかりである。それらがどれだけ庄野家の内実を反映したものであるかは、問う必要のないことであるが、ともかくも、小説に見られる限りでの庄野家は、病氣などがあるにせよ、幸せな安泰の日々を送っているようである。問題はないのである。子供は親孝行だし、嫁は舅思いだし、孫はみんないい子なのである。

こういう傾向は、すでに『総合わせ』(一九七〇・一一)や『明夫と良二』(一九七二・四)などに見られたが、近年の庄野文学を読むと、実人生の危機を克服した私小説家の心境小説を読まされてくるような印象さえ覚えてきそうである。『夕べの雲』には、表面

にはあらわれ出ないが危機を内在させているかも知れない家庭生活を、必死で守ろうとする者の祈りが読者に伝わってきた。『静物』を読んできた読者にとっては、なおさらその祈りが、穏やかにかつ痛切に伝わってきた。それが感動を呼んだといえる。しかし、近年の小説には、その痛切さはない。

もちろん、近年の庄野文学をどう評価するかは、論者の問題設定に関わるから、一概にはいえない問題である。幸福な老後の生活を書き続ける庄野潤三の近年の小説は、ひよっとすると老齡化社会に一つのメッセージを送っているのかも知れない。しかしながら、ともかくも本稿で扱った一九六〇年代までの家族小説が、もっとも問題性を孕んだものであり、また今日、変貌し解体しつつあるといわれている近代家族のいわば理念型をあらわして、家族のあり方を考える際の貴重なテキストであることは間違いないであろう。さらには、これらのテキストを高度経済成長時代という社会状況と関わらせて読むと、どのような読みが可能か。興味深いテーマだが、これについては稿を改めて考えてみたい。

注(1) 江藤淳『成熟と喪失——母の崩壊——』(河出書房新社、一九六七・

五)。

(2) 亀井秀雄「庄野潤三——『夕べの雲』を視座として」(国文学、一九六九・一二)。

(3) 庄野潤三の文章からの引用は、すべて『庄野潤三全集』(全一〇巻、

講談社、一九七三・六一—一九七四・四)による。

(4) 坂田寛夫「庄野潤三ノート 一七」『庄野潤三全集』第七巻所収。坂田は、「庄野さんは多元の価値を認めるひとのようになって、如何なる意味に於いても、まなじりを決するていの一元論者ではない。」と好意的に解釈している。

(5) 坂田寛夫「庄野潤三ノート 七」『庄野潤三全集』第三巻所収)による。

(6) 桜井陽子・桜井厚「幻想する家族」(弘文堂、一九八七・九)、山田昌弘「近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス——」(新隴社、一九九四・五)による。

(7) 落合恵美子「近代家族とフェミニズム」(勤草書房、一九八九・一二)。落合は、その他の特徴として「家族の集団性の強化、社交の衰退、非親族の排除」などをあげている。これらの特徴も、大浦家にそのままあてはまることはいうまでもない。

(8) 牟田和恵「変貌する家族——家族はターミナルたりうるか」(石川実他編『ターミナル家族』ヘント出版、一九九三・四)所収。

(9) 諫山陽太郎「家・愛・姓」(岩波書店)『勤草書房』一九九四・六)や青木やよひ「フェミニズムとエコロジ」(新評論、一九八六・一〇)。

(10) フィリップ・アリエス『子供』の誕生」(杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、一九八〇・一二)。

(11) 上野千鶴子「近代家族の成立と肖像」(岩波書店、一九九四・三)。(あやめ・ひろはるノートルダム清心女子大学)